

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT



因循一掃

增山守正編輯

全

7 6
3944





増山守正著

滑稽
窮理
福能西園

明治九年十月發
先
京都中林
福井
正堂堂記



掃序

人間の因循は姑息雷同たる者なるを譬
ふ所の風は靡き或は河水能く下流する如く
て世に送らざる順利なる溫和の様は見ゆを
そと異阿波と追いつきを免れざるは迷うる之より反
て異説立てる卓尔獨見なる者、恰も浪を砕く岩
又一つは寒風も立つ松栢の雪中より益青き
ぬくも色世より灰なるも心これ共其直き事矢の

如、道よ破竹の角にん僕を右よ及りては文
明の沖代よ遠く大沖惠の深きふ法一唯徒
光陰を消すに多極の忠告ありき因り白髪霜鬢
を振りては如く天地の窮理の書史よ眼を曝し
窮覚悟せし故に世よ使らるる年の意習一
新著しを既よ官許を得し故に公様をふりて
世よ問ひぬ今又は書著しを於因循を去らんと
し名附し因循一掃しとふ看方彼の書よ一雙

能趣意と見たりて誤り故に一窮補せん事
を干葉乞ふと云

文明開化聖恩深
實学研窮寤寐銘
掃_レ去_レ因循和_レ解_レ弊_レ
歎_レ某_レ公_レ法_レ一_レ新_レ心_レ

明治八年一月

丹波信太郎 増山守正撰



因循一掃

目錄

龍 麒麟 鳳凰 龜 灸 鶴

鎮帶

肉食

結髮

附 勸學以呂波歌

因循一掃

丹波綾部

增山守正著

龍

龍ハ古書ヨ能ク幽イフ能ク明イシ能ク大イシ能ク小セウシ能ク天テンニ登ノボリ能ク水ミヅニ潜ヒソカニ入イリ名ナハタツト唱ナエテ四シ足ソク五ゴ采サイニ殊ツノ外オホカニ神シ靈レイヲ一イチニ世ヨノ中ナカニ鱗リン蟲チュウ種シュ類レイ多オホク数カズ三サン百ヒャク六ロク十ジュウ六ロクニ一イチニ龍リウ夫フヲ之コトノ長ナガトシテ八ハチ十ジュウ一イチノ鱗リン有アリ又マタ其ソノ龍リウニ三サン様イサマハ區別クワベツノ有アリテ鱗リンノみ纏マヒテ蛟カウト云イヒ翼ツバサ有アル哉ナラニハ應オウト云イヒ角カクノ有アルヲバ虬キウ龍リウト云イフト説トクセテ鬼キノ角カクノ神シ變ベン奇キ特トクノ德トク備ビヘ出デ没ボツ自ジ在ザイ雲ウンヲ呼ヨビ天テンノも登ノボル様イサマノ説トクト是コトヲ實ジツ學ガクノ真マコト成セイテ窮キウ理リ舍セ密ミヲ知シラぬ故ユヘ取トリ認トメムナ



る傳筆 (世因)

古來龍說悉

虛然

即是有名無

實傳

事理當知鱗

甲體

排雲何得到

天邊

き孟浪の說を立ると思はるゝ夫は乾坤裏兩間の森羅萬
 像有機無機上ハ日月星辰より下る昆虫微物もも総一
 定範圍あり竟ふ六十餘元素より歸して天象地球皆其理其
 體有らぬあ抑地球發生の動植二物の有機體金石土質
 の無機體も炭酸水窒諸原素の舎密親和の集合を以て製
 造せざるな一然らハ俗よ云ふ傳ふ正法不測なき理あり
 然るも支那の國ふる龍の無き理を考一を妄に虚を吹え
 空を説き廣大無窮な説を附け天子の徳を龍より比し龍顔
 龍體逆鱗と人間外の名を付る愚痴の至りといひつる
 抑天子の其徳を日よ比し月よ象しハ現在光り輝き一實
 地の譬喩と思はるゝ然るも龍といふ物ハ世よ無き物と

察まふり假令有るも水陸の両間兼る動物の類は歸する
 以萬物の靈は生ぜし人間の未ど其上に上極の天子は比
 較する事ハ愚痴と大罪道せんや假令ハ爰は人にして人
 を指さず獸面と評せハ必を怒る處一是は何故ぞ人間を
 獸に比したる故あらん假令龍徳神變の真は世界は有る
 ませよ人間外の者なるは萬物靈の其上に無上至尊の聖
 體を人間外は象るも無禮至極と云ひつゝ處一抑天は登る
 說雲を起すの雨を呼ぶなると品玉輕業師或ハ飛鳥輕氣
 球眺る様は幽明や大小變化出没のあり處き道理更はな
 一羽翼備へし鳥々々人飛揚の時間限りあり況や長體鱗
 甲は應龍假令一翼の有るも致せ何は眼當て何を望て

蒼々の涯際もなき空中へ何を飛揚のあり處きや上は
 下る道理あり然るは龍の天上ハ人喧しく唱せし遂は地
 降を見し人の無きあて虚をハ證を乞ふ況や天地の大範
 ハ羽翼ハ羽翼鱗甲ハ又鱗甲は其種類皆判然と分せしを
 鱗甲體の其上は翼を備る應龍ハ羽翼の鳥は屬するも鱗
 甲類は屬するも所謂俗は繪空事画きし牙は角の何は鬼
 の姿を見し如く龍も牙と角と何は是は虚誕は繪空事
 鬼も猶一層の鱗翼爪角錯雜ハ虚無妄誕の證據あり萬
 一有らハ禽獸と魚蟲の間属族の區別は疑惑起る處一况
 や世はハ絶る無き龍の名前を仰山は説き出さのみ和
 漢共帝王はさへ比較し利口らしく説き觸らる其根

本ハ乾坤の實學窮理知らざりて古來欺罔の因循其説は從
 ふ故をうし夫を萬物の形を中ふ人をハ長とて獸ハ
 ハ熊虎獅象の大は至魚は鯨鯢鮫鱈の大はり鳥は鷹駭鳥
 雕鷲鷄の大は至蟲は蟒蛇は龜鼈の大はり風土は因了
 古來より生せぬ國ハ有らざる天地開闢其以來生せし物
 ハ萬古まざる有る處を理なき眼に見えぬ微公物なら是非
 もなし大なる者の平生は眼は掛らざる道理あり上代仰
 ぐ日月も今日仰く天象も五行も今も變りなれ人物禽獸
 魚蟲一草一木有機無機孳尾胎孕の夫々は皆定則の何
 る物を能く幽明や大小は能く登天や水潛の變化出沒を
 る様も奇妙なる事の有るべきや僕も愚按り断せんは龍を

固より其外は麟鳳も今の今日も種類残らぬ其物ハ終
 断し虚説も中よ就ても麟鳳ハ鹿と鶴との變體と論
 定しある事足らん龍も或ハ大蟒の誤認或ハ變體とせば
 説ありしを處りしを何せよ致せ別段は龍と麟鳳一種類
 有る處を物とを處りしを聞かや古語に有る通り夫を悉
 く書籍をバ信ぜハ書籍なきも如く有るを知らざ
 るや一草上り論も支那の所謂黄帝の屈軼草や堯帝
 の世子生ひ出し曆草ハ是を皆真の虚説とを有らば今も
 も傳へたる佛家ハ八大龍王たり是を亦虚無や寂滅や空
 理方便説く宗旨決しは齒牙の掛くべからざる當時ハ則文
 明開化實地窮理の御代とて唯因循も古記録や空理の

説は信従し世は媚び人よ阿り了唯有難し尤も追従のみ
 此著述家ハ真活眼と云ひ難し古代の空理因循を一掃致
 し諛ハを新發明の説吐了四方大家の先生は是正を乞ふ
 正眞の道ハ中乎外乎乎世界萬國通論は歸して後止む
 るま道理あり総了支那書ハ傳來の虚誕邪妄の説多し禹
 帝の江をバ濟し時黃龍現し舟を負ひ舟中の人懼せしは
 禹帝ハ命を天よ受け力を竭し萬民を勞ふあらち何し
 龍をバ憂し恐るべき龍を見る事堰堤を視るが如し
 有りけしハ須臾は其龍首をバ俛け尾をバ依せ逝くと是
 も禹帝を譽んとし龍よ託せし寓言の虚誕の説と思はる
 天地の道理察せしは總て支那書を信しるは禹帝の御代

天金を雨ふしを事三日と有る記録ふど如何ぞや霜露
 雨雪や霰雹霰是らハ水氣の變體が風ハ空氣の動搖なり
 雷電ハ酸素と水素平均を得んと欲し空氣をハ越列氣
 迸發破透する何ぞ我空氣の填んとを故し声は光あり
 其他稀なる酸素瓦斯燃え固まり了燒槽は彼の俗は鍊糞と
 いふ如き磁石とあり落る事あり春秋の書は石隕と處々
 よ出たり其外は三日間ハ金の雨ふると云理ハ無き義也
 此類支那は數多し閱者ハ別は活眼を開て欺罔受く其の
 其其證據は天子たる徳の有無は従ふる陰陽不和豊凶
 の造化隨意なる様と思ふ可笑し然らハ堯は洪水
 患ふを理ふなき道理湯の世は大旱七年有る理あり或ハ

天は星飛塵ハ其分野多シ大將ハ不吉ヲ有ル日食や彗
星出ルハ其罪を天子宰相兵乱ハ歸スル人ど々年月を
限リテ出ル日月の蝕や彗星仰ぎ見テ恐レテなまも曆數
の道を曉らぬ故ぞか五大洲裏や六大の洲裏テ仰ぐ日
月の蝕や彗字其外邂逅ハ出ル星見テハ千分一や萬分の
地球の一ハ足りもせぬ微々小國の君徳の有無ハ歸スル
愚劣至甚ハ嚴子陵東漢光武の腹上へ足加セバ太史
出テ客星御坐を犯テ事甚急ト云らなると三尺童子ハ知
ル虚語を載セテ事理を知らぬあり廣大無邊の天象を
微々々々の嚴子陵足一本で客星を自由隨意ト動セテ様
ふ歴々明々と歴史ハ載セテ馬鹿ハ何り夫レハ限ラセ西

漢の宣帝の世ハ丙吉が鬪死を問ハテ牛喘を問テ
陽也造化の變を宰相の徳ヲ自由ト振り舞ハテ様ト思フ
愚痴あらん所謂天ハ測らぬ風雲起リ人の身ハ又暫ク
の禍福阿ラリ抑地震雷火多ク天アラ造セテ災ハ猶避ク
けテ自らト作り出セテ禍ハ遁ラズ鬼ハ角ハ非理
小心を晦サテ此文明の化ハ浴テ廣大無窮の鴻恩を蒙ル
からハ實學を研窮ナリテ智を研テ古來因循雷同の龍鱗
鳳を排斥の新發明の説を述テ聊トモ其説の取ル處キ
アハ本懐ト僕ラ愚眼の届クだけ僻論述テ活眼の君
子ハ是正乞ふト以テ

麒麟

麒麟の説出

四時

其愛何能怪

麻婆

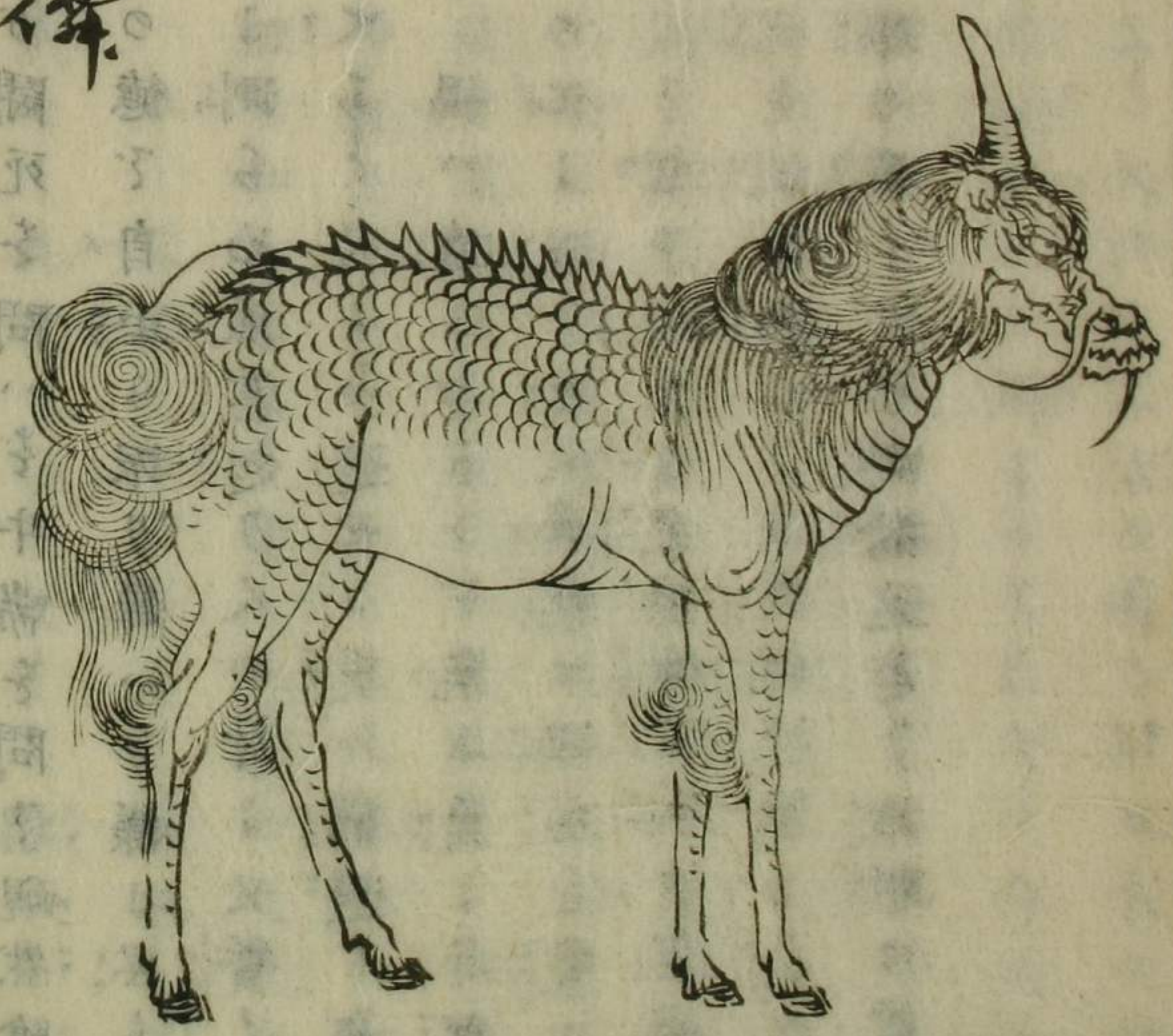
須後乳坤結

孕物

名然河の化

生奇

石俤



麒麟ハ古書ニ仁獸ト麋ノ身牛ノ尾角一ト牡を麒麟ト名付
 け北ハ麟又一説ニ麟ノ身ハ麋ノ身牛ノ尾馬ノ足色黄蹄ハ
 圓ク一ト一つの角結其端ハ肉包其鳴ク音ハ鍾呂ト中
 リ其行ク時ハ規矩ト中其遊ト時侶行セト良地擇ト後
 フ愛リ生蟲履ト生草ヲ踐ト群リ居リト世ト王者ノ
 至仁ト有る時ト則ト出ト遊トト至又一説ト并州ノ畏ト麟
 ハ有るなきト瑞麟トトハ無トト説キ字義總略トト以テ書
 ふる麟ハ乃大鹿トト至ト麒麟ノ骨髓を説出トト至言
 何ト是ト麟體ノ本源を前条説トト云如キ王ノ至仁を待ト
 出ト生蟲履トト生草を踐トトあんとト窮屈を辛抱仕ト
 く物トト又中条トト以テ如ク瑞麟トト差別トト有るト

箸ハナリ魯國ヲ得ル其麟ハ偶然得たる變鹿乎并州邊
 小常住の麟有るまじつ珍奇トハ云ハ難ク一魯國ヨリ
 得たるが瑞の麟まらバ其種ハ別ニ何國ヨ育ち了狩ヨ得ら
 せしや忽然氣化ヨ致まよト俄然天ヨ降るま一卒然地
 よつら湧まよ孔子歎ト春秋を作らる不審至極あり
 僕リ愚按了論せん何レ怪む事であら鹿ヲ見なさバ事
 足らん唯孔聖の獲麟ヨ筆を閣さり歎息ハ時勢の澆季王
 道の行ハせざる萬感の胸ヨ群リ満了時時ト時ト變鹿
 の温和の牝獸非命ヨ討殺され不仁あり時ト感激寓
 意了春秋作り玉ふらん聖人待了邂逅ヨ氣化了出
 麟ゾあ一唯偶然ヨ快鹿の牝獸ト見ハ事足らん抑麟の正

體ハ字義総略ヨ如ク大鹿ト見了通例の鹿ト違ふ
 變體の鹿ト見なさバ世の中ノ疑惑ハ更ニ無る處ト并
 州邊ヨ居了説了實あり真ヨ四靈あり貴徳トナリ珍奇
 なる獸了る更ニあ一夫せし何レや瑞麟の附會を
 了蛇足添へ高ク知せし獸類を王者の至仁待了出了天
 降地湧の如ク説了是因循の愚論あり若一又山ヨ隱せ居
 了王者至仁を待了せ熊虎猿兔ト諸共ヨ獵夫ヨ得らる
 了けせ共孔子春秋閣筆の起源トあり一其外ヨ黄帝の世
 了麒麟苑園ヨ遊ぶ了了堯の世ヨ麒麟郊藪ヨ遊ふ了
 了又漢の武帝元狩元年一角獸を獲了了あり其他ハ多
 了見當らざ山ヨ隱せ了君王の至仁を待了出了なりハ舜

や禹王や湯王や文武の世より出る理若し又山より住む
なりバ獵人共の古来より數澤山より得るべき理其義も聞
ぬ其譯ハ常住するべき證確と山も住まざる黃帝と堯の外
あり數多き聖王の世より出る事のなきハ瑞麟祥靈と持雜
子多き物とあり偶爾變體大康と見たり以て善るなり
左あり靈獸瑞麟の王者至仁の時待り山より隱る物
せむ何樂しむ生蟲も履まぬ生草踐まぬ時を待居
る辛抱ハ人より申さバ俗に云ふ阿房律義乎且又馬鹿正直
と云つる僕り愚按り論せんは瑞麟九麟差別あり時
取りの偶然より出来損じたる一大康治亂聖愚の差別あり
其證據はハ舜禹湯文武聖王歴々の世より出ると聖なる

き漢の武帝の世より獲るる齟齬しと出たりは非ずや彼の
總略より通し皆庶中の一種族角は肉はる變形は温和
の性を頂き人傷むぬ仁獸と見たり可なり呉々も偶
然康の一と變化しる姿と見たり乾坤間の大範圍
孳尾胎孕の夫々も萬古動ぬ準則の有るべき者を氣隨
意は水より泡の立つ如く何をハ種子は氣化せんや況や
聖主何は舎密有る隨意は氣化させる奇功奇特の有る
や決して麟を靈瑞の有る者ともべしと左ハ去り
あつら聖王の世なれば出るといふ事ハ夫れ一理ハ有
るなり暴君ありバ禽獸ハ愚ろ人々ハ傷む然るに聖
帝仁君ハ仁愛物より及ぶ故妄り物を傷む故は禽獸近く

馴せ都城近くよ来り故麟も限らむ猿鬼鹿皆諸共よ世よ
 出ん其證據よハ文王の世よ名も高き靈圃や靈沼邊よ群
 せ遊ぶ鴻雁鹿白鳥も手よ馴せ遊ぶ道理あり麟の瑞九
 抱はらま山よ隱否も問ハる麒麟ハ偶然大鹿の變形
 體と定めらば別よ怪しむ事ハなかり古よりハ靈物と説き
 一も僕ハ珍とせむ舊習因循一掃一新説述る博學の君子
 小教諭乞ふとゆふ

鳳凰

鳳凰ハ古説よ雄を鳳といひ雌を凰といひ好む梧桐の實
 を食ふとあり説文よ神鳥よて蛇の頭魚の尾鸛の頸鴛の
 頸龍の文龜の背燕の頤鷄の喙五色備り舉り東方君子の



形姿偶然有る夏事
 軋坤 動植一様場
 鳳凰 何れ怪生於新羽
 毛新にかみ新光

る傳有 (世的)

國クニ小出イデ四海カイの外ホカ小翔カウ翔シヤウ一崑崙コンロン崑崙コンロンを過ス砥柱テイヂウを飲ハみ羽ハネを弱ジヤク
 水ミヅ濯アラフひ暮クレ小風フウ定ケツ宿シユクを河カ陸リク佃テン云イ小羽ウ蟲チム三百六
 十トウふフ了リヤウ鳳フウ之ノ長チヤウと河カ注チウ疎ソの說セツ云イへフ小瑞ズイ應オウ鳥トウ
 ハ其ソノ高タカ六尺ロクシヤク許バカり有アるトあラ山サ海カイ經キョウ云イへフ小丹タン穴ケツ
 山サ鳥トリ河カ其ソノ狀カタチ鶴ツルの如ノくカりコ五コ彩サイの文アヤを備ソナへフ小丹タン穴ケツ
 鳳フウとト以ヨふフと有アり左サ傳デン服フク虔チン注チュウいハ小貌カウチウヤウ恭コウ體テイ仁ニの時トキを
 則スナハ鳳フウ來ライ儀キを諸シヨ說セツ終シュウ々ツツ異イ々ツツ何ナニせセ何ナニせセ確カク乎フせぬ議ギ論ロン
 先マつ說セツ文ブンを辨ベンせんト形容ケイヨウ比ヒ較カウハ其ソノ儘マ於オ論ロンせセ其ソノ說
 の中ナカ東トウ方ホウ君クニ子シの國クニと河カ其ソノ目メ的テキハ恐オソらくハ我ワ日本ニッポンの
 國クニふフらん遂ツイは我ワ朝チヤウ古コ來ライより鳳フウ凰フウ來ライ儀キを聞キかれど
 天武テンブ天皇テンノウ年ネン中チュウ白ハク鳳フウとト以ヨふ年ネン號ガウハ鳳フウの來ライ儀キの有アりハせセらウ

支シ那ナの膾ヘ炙シヤの瑞ズイ鳥トウの名ナを寄ヨせセらセ故コあるハ然シカるハ鳳
 の羽ウ毛モウは五コ彩サイ備ビふト傳デンふト白ハク鳳フウの名ナは出シ典テンハ僕ボクの
 不フ學ガク解ゲ難カタ必カナラ由ユ來ライをハ所シヨウ有アるハ必カナラ事コトと思オモふハらウり
 夫フハ叔ササ置オキ崑崙コンロンの山ヤマハ則スナハ支シ那ナの國クニ崑崙コンロン過スとハいハらハ
 直チキ支シ那ナの國クニ指サりハ東トウ方ホウ君クニ子シとハいハふ事コト乎カ分フン明メイふハぬ事
 なハらハ如イ何ナニとハ鳳フウの出シるハ名ナ支シ那ナハ限カキせセるハ事コトとハいハ僕
 見ミ聞クニ狭セマき故コ支シ那ナの國クニを其ソノ外ホカの他タ國クニハ鳳フウの有アる事コトを
 聞クニ故コ瑞ズイ鳥トウや靈レイ禽キンを論ロンを左サ傳デン服フク虔チン注チュウ云イ
 小貌カウチウヤウ恭コウ體テイ仁ニの時トキハ則スナハ鳳フウの來ライ儀キを仰オホ山ヤマとハいハ呼ヨぶハ
 了リヤウ黃ワウ帝テイの時トキ鳳フウ凰フウ來ライ儀キを阿ア閣カクを巢ス組クミ小昊セウ金キン天テン氏シの世ヨに
 集ツクり堯ヤウ帝テイの時トキ阿ア閣カクを巢スとハいハ漢カン昭セウ帝テイの世ヨに一度イチド

宣帝の世は六度出た其末代は鳳凰の來儀、更に聞ゆる
り如此よ世を隔る邂逅出た鳥あり、小乾坤化生胎生や孽
尾胎孕は、大模範有る屬族亂らぬ、常の規則の其中は聊
變形出來損一有るも此世の習ひあり、然るは鳳の明時の
み來儀をまゝ、此鳥ふせ、其見は、その年月ハ何せよ、任了
何をから、今聖代の報知得、演戲俳優幕開き、折聲聞て進
み出る如く來儀をまゝ、鳥乎抱腹をくき、迂遠あり、成る程
前時出現の時、惡帝暴王の時、下無き故靈鳥と名を付る
乎、知らね共聖の名前ハ付らせぬ、漢昭殊は宣帝の其一
代は六度迄出る程あり、バ聖帝明時の伏羲より、神農、堯、禹
湯、文武此聖代は、何出たぬ、鳳のぬらりと云べき故、僕、愚

按て断ぜんは鳳は決して靈鳥や瑞禽の名ハ下させ、聖
王明時來儀を、其確説も建了難く支那は出現せし時、
聖帝御代の時、か夏桀殷紂、周幽や暴秦の世は出た、
ハ是れ偶然は鳳鳥の幸福とのみ思ふなり、抑鳳ハ鳳系
の一種屬族有る事と必一定をなす、む僕、臆論吐ん、
ハ山海經の説は、其状鶴の如き義を取考へ、見了處
鶴の卵生發育は連せ、偶然變體一五彩の羽翼美しき鳥
と變せし物を見了、鶴の名を換へ、鳳と名を付たる物と思
ふ、若し説文や山海の經は論を、如くよ、東方君子
の國は出た四海の外は果迄は、翱翔したる且、又丹穴山
ふ常不斷住む鳥あり、バ取りを、や、珍奇あり、を、き道理ふ

く譬へハ雀鴉を見ら如くは靈瑞の名を下を履き價
 なり唯偶然は鶴の旗變體一も珍奇鳥所謂支那の虚文
 から事仰山は形容の潤色加へ種々無量廣大らく説き
 たりと見ると奇怪も靈瑞も消え迷ひの夢醒ん夫を乾
 坤の生々も偶爾不測の變化あり周の宣王癸卯ある三十
 年馬ありて變化一人とあるは我朝よるも
天武天皇十年は赤龜獻まゝ記録あり形氣の變ハ羽翼まを
 深了白鳥や白鳥や白雉朱鳥や朱雀まを無きと確決まを
 ららむ其證據は一人よても現世若年幼童の中あら白髮の
 人も有り亦赤髮の人もあり鶴の變體五彩ある道理知りた
 る事ありバ古來今來喋々の麟鳳龜龍四靈說因循雷同を

履き義ハ毫釐も無しと思ふは至

龜

龜ハ古書よ上圓あるを天よ法り下方なる地よ法り背
 の上盤るハ丘山よ法り玄文交り錯て以て列宿をあり又
 一説は甲蟲三百六十ありて神龜之り長かりとあり所謂
 麟鳳龜と龍を四靈といふ了尊が鶴ハ千年龜ハ萬年の
 齡を保つと稱賛を祝壽賀筵の詩歌よるへ龜の齡を讀み
 込ぬ事稀あり去りまのら實理を以て論まれば新陳代
 謝の動物の活用絶えぬ有機體木と違ふは千年や萬壽
 を保つ道理あり世間ハ松ハ千年の齡保つと稱まれば木
 千年ハ難しん況や動物新陳代謝も活用腸胃の體よ於るを

靈龜名震數千載
國一宵方猶多他傳
志一吾又明并化世
善切世為芳惟牛



る傳 (世明)

や世の諺は浦島に靈龜に乗了海に入り龍宮界に到り
ハ乙姫とやら契り來了玉手箱との貰ひいと申傳へる去
る歌よ

浦島が聞了悔しき玉手箱明了嬉しき玉の初春
或ハ安部の童子九龜を助け奇特も靈龜に乗了海に
入り龍宮城が鳥音を分つ玉得了歸りいと無稽社撰を
吐散らる世よを愚物も多きあり能く事理を察せし
氣中生活まゝ人の水に住居のなるべき正法不則あり
理多星或曰く夫れ足下靈龜の説を謗せ共世よ格外の大
龜は星足下知らねど靈龜とハ大龜を指すの言あらん足
下妾よ小龜見了大龜の有る哉知らざる乎答了曰然らむ

今足下説る如く現在に徒大なる形見し神と靈とを
 附する象鯨以て神靈の名を稱する世の中は功用の
 神靈の名を付する益なき麟鳳龜龍は付んよる
 牛羊犬馬猫雞は神靈の名を加へなん何れも功用無き物
 神龜靈龜の名を許さず不稽の説と云ひつる今神靈の
 其實を擧る云々んは西洋の名醫の術や諸工術ホトカラ
 ヒ蒸氣器械や舎密術是等よるハ神靈も天工奇巧の
 名稱も付る賛歎をばきよる

灸

灸火を以て療治するは法より西洋より此灸療法を
 モグサと唱ふより其法を線香の火を能く搗き乾したる

此書は梓餘
 成少後モシヤ
 ナイトノ正説ヲ
 得タリモサハモ
 ガヤイトハ燒所
 ト云フ義ナル由
 因テ掲テ考
 三備フト云フ

王政維新天下榮
 文明開化養人生
 止来安無傷身灸
 當浴新鮮空氣清



艾の點一人の背或ハ手足等貼火を以て療むるの稱
 然より如此事ゆへモグサと唱ふる是は西洋の語言
 上ハ灸治の法西洋より無き非は之を當時西
 洋より此法を用る事ハ甚稀なり我國よりハ之をヤヒ
 止るゆへ愚按は燒く人といふの略語歟但線香の火
 艾の相合し了モクサの名も出たるは當時より艾を
 コモモグサと唱へ來り了艾の方へ名を奪ひ取り普通
 艾の換名の様よのみ思ふハ誤りなり抑此法支那より盛
 流行し支那醫の十四經絡の圖説に従て灸穴多數救擧
 せを處あり其方流傳し我朝に盛行ハ當時に至る
 ハ津々浦々或ハ野の末山の奥僻土遠地に至る程灸治

頑固信向し灸點されバ萬病も治まらう如く思ひ込み甚
 しまし至るハ風土に因て嬰兒をバ出産まらや早々早
 きる半月乎遅くも二三月間は必を例に背し灸を此因循
 ぐ蔓延し泣けハ夫を灸眼し賜り込めハ夫を灸暑寒前是
 る亦灸月々の二日の日よる是は灸西も東も灸もらけ近
 世の俳句
 逃る行く隣に二日灸の那
 罪咎もなき無我無心健康な身を接し過ぎ子を可愛も
 思は仇負餘り了引倒を事共知らむ何故は灸をへるは
 り理も知らむ向ふも見も無二無三滅多や多らよ背を
 焼了熱を苦しみ泣き叫ぶ秘藏の子をバ此世より阿鼻焦熱

の地よ置^イ七^シ轉^テ八^{ハツ}倒^{ダツ}號^{ガウ}泣^{キウ}の子^コよ^ヨ構^{カウ}ハ^ハ喜^{ヨロシ}是^{コレ}成^チ佛^{ブツ}
 ち^チ様^{ヤウ}多^タ氣^キ取^{トリ}よ^ヨあ^アつ^ツ醜^{ウシ}然^{ゼン}と^ト澄^{スウ}せ^セ顔^{カホ}暮^{クラ}せ^セハ^ハ馬^バ鹿^カの
 至^イり^タと^ト以^イふ^フ處^チを^ヲ歎^カ物^{モノ}の^ノ道^{ダウ}理^リを^ヲ知^チら^ズま^シて^テ唯^タ出^デ放^{ハラ}題^{タイ}と^トす
 慶^{キョウ}置^チハ^ハ昔^{ムカシ}話^{バナシ}よ^ヨ何^{ナニ}も^モ通^トり^ト知^チ才^{サイ}の^ノ子^コ共^{トモ}其^{ソノ}親^{オン}の^ノ愚^グを^ヲ侮^{アハ}り^テ了^ス戾^{スレ}
 せ^セな^ラの^ノら^ラヤ^ヤス^スの^ノ字^ジ書^{カイ}了^ス此^{コノ}字^ジハ^ハ何^{ナニ}と^ト讀^ヨむ^ヨ讀^ヨむ^ヨ御^ゴ覽^{ラン}よ^ヨ差^サ出^イさ^ス
 を^ヲ親^{オン}を^ヲ我^ガ憐^{レン}の^ノ我^ガを^ヲ張^テ了^ス是^{コレ}坊^{バウ}よ^ヨ夫^フを^ヲハ^ハ柄^ヘ杓^{ヤク}と^ト讀^ヨむ^ヨ字^ジト
 ヤ^ヤグ^グ餘^ヨり^リ杓^{ヤク}の^ノ柄^ヘ長^{ナガ}過^スると^トい^ハへ^ハを^ヲ童^{トウ}子^ジを^ヲ吹^{フキ}出^イし^テ是^{コレ}を^ヲ親^{オン}父^フ
 さ^サん^ン滅^{メツ}法^{ホウ}ふ^フ是^{コレ}ハ^ハ申^{マウ}ま^スと^トい^ハふ^フ字^ジト^トい^ハふ^フ笑^{ワラ}ふ^フと^トの^ノら^ラよ^ヨ中^{ナカ}に^ニ
 字^ジを^ヲ書^キ了^ス見^ミせ^セせ^セバ^バ負^メぬ^メ氣^キ了^ス坊^{バウ}よ^ヨ夫^フを^ヲハ^ハ挾^キま^ス箱^コと^ト云^イふ^フ字^ジ
 よ^ヨ隨^ズ分^{ブン}見^ミ事^{コト}よ^ヨハ^ハ出^デ来^キた^タせ^セど^ド其^{ソノ}捧^{ホウ}う^ウら^ラつ^ツと^ト太^{タイ}く^クか^カつ
 る^ルの^ノよ^ヨ不^フ便^{ベン}利^リあり^リと^トい^ハふ^フを^ヲ聞^キき^キ童^{トウ}子^ジハ^ハ中^{ナカ}に^ニい^ハふ^フ字^ジを^ヲバ

父^チ上^ウ知^チ一^{ヒト}召^メさ^スせ^セま^スや^ヤ是^{コレ}ハ^ハ聖^{セイ}門^{モン}傳^{デン}統^{トウ}の^ノ惟^ヒせ^セ精^{セイ}惟^ヒせ^セ一^{ヒト}不^フ偏^{ヘン}
 不^フ倚^イ天^{テン}理^リ當^{タウ}然^{ゼン}人^{ニン}事^ジの^ノ規^キ則^{トク}的^{テツ}の^ノ黑^{クロ}星^{セイ}き^キり^リを^ヲ外^{ハツ}に^ニあ^アら
 ぬ^ヌ意^イ氣^キ強^{キョウ}く^ク露^ル急^{キウ}ら^ラぬ^ヌ勉^{ベン}強^{キョウ}の^ノ大^{ダイ}志^シを^ヲ弓^{キウ}を^ヲ引^{ヒキ}絞^{シヨク}り^リ邪^ヤハ^ハあ^アき
 敬^{ケイ}心^{シン}の^ノ正^{テイ}直^{チキ}の^ノ矢^ヤを^ヲ射^イす^ス中^{ナカ}に^ニ其^{ソノ}中^{ナカ}の^ノ字^ジを^ヲ候^{サウラフ}と^ト教^{ヨメ}ら^レせ^セた^タる
 至^シ愚^グの^ノ父^フ中^{ナカ}ら^ラぬ^ヌ譬^{ヘイ}喻^ヨの^ノ遠^{トウ}ら^ラぬ^ヌ假^カ令^{レイ}バ^バ赤^{セキ}子^シ物^{モノ}い^ハふ^フ是^{コレ}
 せ^セ父^フ母^ボよ^ヨ罪^{ツミ}咎^{トカ}も^モ無^ナき^キ我^ガ背^セを^ヲバ^バ何^{ナニ}の^ノ仔^シ細^ジで^デ焼^{ヤカ}う^ウと^ト斯^カ程^ト
 よ^ヨ焼^{ヤカ}け^ケバ^バ身^シ體^{タイ}よ^ヨ何^{ナニ}の^ノ功^{コウ}能^{ノウ}何^{ナニ}よ^ヨ窮^{キウ}理^リ有^ウる^ルの^ノ事^{コト}と^ト問^トは^ハな^ナバ
 柄^ヘ杓^{ヤク}の^ノ答^{コタヘ}へ^ヘ挾^キま^ス箱^コ棒^{ボウ}の^ノ抜^ヌき^キ挿^サし^シま^スの^ノさ^サべ^ベ窮^{キウ}理^リ利^リ言^{ゴン}も
 知^チら^ズま^シて^テ流^{リウ}行^{カウ}事^{コト}ハ^ハま^マう^ウし^シて^テ因^{イン}循^{ジン}姑^コ息^{ソク}雷^{ライ}同^{ドウ}子^シを^ヲ苦^ク
 し^シめ^メる^ル阿^ア房^{フウ}者^{シャ}子^シよ^ヨり^リも^モ親^{オン}よ^ヨ文^{ブン}明^{メイ}の^ノ灸^{キウ}を^ヲ貼^{テウ}し^シて^テ愚^グの^ノ眠^{ネム}り
 醒^{サマ}し^シ閑^{カン}化^カの^ノ安^{アン}樂^{ラク}へ^ヘ導^{ミチ}く^ク事^{コト}が^ガ肝^{カン}要^{ヨウ}と^ト夫^フを^ヲ灸^{キウ}法^{ハフ}ハ^ハ西^{セイ}洋^{ヤウ}よ^ヨ有^ウ

法をばハ一概に排斥をばき事であく灸の道理を能く
 知る目的付る用しよバ頗る功ハ有ぬ者唯徒らよ可愛
 さの餘りて鼻負引倒し灸點をねハ一総は萬病治りて壯
 健よあつと心得其上よ未だ慾不りて小きより大きくま
 せハ能く利くと大灸點罪なき微弱の小兒幼童を半
 死半生苦しむる今其弊を矯むるあり抑灸の功能ハ大灸
 りあつ其功ハ反り小よ有りぬ者能く乾く艾をバ小
 く捻りて火を點し徐々緩々よ腹力を起さしむる緊要
 を灸火を貼し漸々よ温より熱よ及ぶ刺戟感し堪え
 忍ぶ為よ腹張り息を溜め肺の氣胞は皆脹せ横隔膜を壓
 垂し身體総て努力せし灸火滅し溜息をホし突きま

ハ肺臟ハ萎縮し横隔又上り一上一下心藏を壓迫し
 血液を流利循環健運よあつとむる灸點の功用よ
 多しふ癒けせ夫故無理よ大灸を點し努力を過さしめ或
 ハ無心無我で居る子をハ驚愕させしめバ壯健所驚疾
 を引出せ咎ハ如何ぞや因り灸火の功用ハ精神爽快血液
 の循環進む強壯の治療と見せバ事足らん然り灸を點
 せりよ極喫緊の要語あり艾ハ至極能く乾き捻るを至極
 柔うよフハリくと小粒よ捻りて大よまべんうむ必を堅
 くまべんう唯火よ熨易く早く消る紙肝要とせ
 左あつ俗の諺よ称する如く牛糞よ火の付く如く付ま
 難く又消え難く有る時ハ唯徒らよ何迄も熱く腹を張

り勞を努力に神氣衰へん因り灸熨心得ハ晴天無風の日に
 を選り身體無熱の時を見り小粒顆より點を愈し必大に
 灸を灸るべし唯腹張りし彈力の起る灸以て度とを愈し
 世の人多く誤りて灸治ハ大に何らせんバ身を温むる不
 足とて小きハ以て功ありと思ふ者有り左にありて身を
 温むる主意ありハ顆粒の火より燒を共火燒燒火や風呂
 灸も満身温めたらんを片落もよく温まり功能めき
 見え共反つて夫ハ悪しきあり故如何あれハ腹力を抗
 抵さざる功ハよく火を灸ハ火毒内陷し風呂より弛弱起
 るを愈し唯小顆より加減よく腹部に力起るやう肺に氣を
 溜め膨脹し横隔膜を垂下しし神氣清爽血液の活潑循環

もる機轉自然の妙を輔佐するは殊に灸を點するは名手
 選ぶの肝要を抑諸事ハ覺悟し居ると居らぬの相違は
 了事を恐ぶの多少あり寢耳は水に敷うらの棒に出逢ハ
 狼狽ん身を火に燒くも覺悟し居りあるを事小堪えぬ座
 一堪えぬも覺悟なきは因り假令ハ俄然點灸の背脊上を
 墮落せば其人大愕飛上り毛聳粟肌震慄し自段墮踏了膽
 冷ま是は何事ぞ覺悟し居るハ灸火の圓轉し背脊に落
 事如き何ぞ驚く事何ん然るも覺悟なき時ハ瑣細な事
 古様の驚き何ぞ養生を求る趣意は反對し及病氣
 生る愈し俗に所謂生兵法ハ大創の基毛を吹き疵を求め
 たる類あり故に灸點の時ハ前條論にたる灸治規則に照

準一次に炙點得と人の墮落をさせぬ快手をバ撰と雀ふ
 了用ふる一唯去りたるのら文明の世に至るハ因循の灸治
 を以て徒らよ身を焼き肌膚を焦まよる寧新鮮空氣浴急
 らむ一と身體腐敗せぬやうに保護する是れ豫備法の第一
 とあるを思ふよる

鶴ハ頗る大鳥なり一と喙頸脚共長し世稱して千年の齡
 を保つと云ふ一風土は因了之を殺す者無きよ一非を
 といへ共世人往々其壽ふ似ん事を祝望する余鳥に比
 されハ獵夫たよ之を殺さる者十は八九は居り或ハ近
 邊に巢を組ハ福德吉慶ありと喜び九と賀筵祝席必を鶴

事理研窮
 造化微因
 循廢慶發
 文華誰誰云
 鶴得千年
 壽當識衆
 禽同一機



る俣
 (世の)

御門ニ巢を懸るの句を歌ひ或ハ高年を祝するも龜
 齡鶴算ふをといふ喜ふハ笑ふべき甚しき非也
 鶴よ々々此賞譽を受け古来よ々矢砲の難を免るハ偶
 然の大幸と云ふ也先其弊を辨せんハ龜の條下といふ
 如く動物族ニ千年の萬年あるの齡をバ得る也き道理更
 ふあり日夜生々長大ニ新陳代謝の活物ハ植物よりハ速
 ふ腐敗ニ向ふ常理あり植物もも千年を保つ長壽ハ稀
 あり同鳥も有りありの驚鷹鳥雁ハ短命ニ鶴のみ
 獨り長壽なる道理あり去りなり熱帶國ハ餘國と
 ハ違ひ生々迅速ニ經過する由聞傳ふ又人倫を指さる
 足下禽あり獸ありといふ必不平せん然るを足下鶴の

壽ニ似る也き瑞々祝ふ其入勇之悦まん長壽を好む
 慈なり鳥比まら甘し道ニ指し鶴ありと云ふ
 則一間のみ此珎しき聖代の文明開化の恩澤ニ浴する
 うれハ奮發し研窮琢磨精出し古来震妄の因循を一掃
 あり鶴ニ似る事とバ深く耻つ辱き而已矣

鎮帶

鎮帶ハ妊娠五月必之を用るを我國の吉例あり其由來
 哀天皇の后神功皇后新羅を御征伐遊さる時偶然御懷
 妊ニ渡らせ玉ふを檀日の浦ニ於て石を取し腰ニ挟み因
 了祝し了曰凱旋し了茲ニ生む玉へと説く書あり或ハ俗

全園日風結帶濃
妊娠多交不造蹤
莫來古者味功吉
勿取產前產後凶



學謝長庚法
百俸

應

ふ傳ふ弓弦を以て甲鎧の上より結んて祝す玉共い
ふ其後軍勝利を得玉心新羅王降服し振旅し御凱陳筑
紫に於て御降誕なり則
神天皇多皇後より兵家の祖神と崇め奉り八幡太神宮と祝
ひ敬む奉る如此吉瑞を以て我國一平は妊婦必之を用
吉例となす者歟僕其實縁を知らむといへども後世は
至り妊婦の鎮帯盛に流行し事理の辨せむ縁故も問は
雷同一夫を妊娘といふや否五月はを待兼る一日迎
も千秋の心を帯を引結ぶ或ハ傳へ誤りて鎮帯さるハ胎
内の兒子分外は肥大する時ハ分挽其節は沮礙或ハ陰門
破裂を恐む肥大甘ぬ様と一途は認めなす力一杯無

理やもら締り胎児を壓迫し妊婦血液循環を障礙するもの
 大害を引出さるり産後にも上逆眩暈する時ハ虚實寒熱
 問えり一物有る下部より上るが如く思ひ詰め譬
 へハ歌の腰締るやいと思ふ又締る因り血液自ら凝泣
 あり順利せを上逆更甚し其理を知らず猶締り彌縛
 彌逆し遂に大害を加ふるに至る慎まざるをけんや賀
 川子玄子之を憂ひ頗る苦心盡力一懇々然と鎮帯の胎児
 不利の理を説き鎮帯廢去せむといへ共其古來より
 舊習の天下の通弊たる者を賀川先生一人より之を救ふ
 能はむ其門人片倉元周より迎ふ我國一般の傳染深き俗
 習を反對防護する事のあはぬを知りし人々の因循好み

に従ひ其禍の大なるめ様を計り鎮帯を福廣く帯一面
 も擴め緩く縛り胎児をバ壓迫させを腹力に助けを得
 る此便りとも亦勤めたりといふ層一希くハ分娩の有る
 時迄ハ鎮帯を用ひを産後腹の冷或ハ諸臓垂下し腹力
 便りなき者ハ右にふ通り鎮帯の幅を廣め緩柔し腹を
 覆ふ寒冷を防ぎ腹力扶助しなハ則害ハ無うる層一去
 せ共是も後來に其弊生し遂に又緊急するに至る層一因
 了舊習因循の固く信し中よ過ぎ恰ハ瓢の腰縛り如き
 禍あらんよ寧鎮帯する者の世ハ無きハ若さる也
 肉食
 世ハ肉食を忌み了之を食まれば其身を穢し七日或ハ半

燕取は年回すは
 潔然 滋養自らの
 誰言 野菜法に就
 眞煉 吸収 色素精



月或ハ一月の間神詣ふるぬ杯いふる之を恐る事蛇
 蝎の如く山野僻陬の地未と因循姑息の域を免せざる者
 多しと以へ共肉食何と身體を穢する理ありんや抑両間
 生活する人物禽獸魚蟲及植物類に至るまで各其職あり
 さるなり小ハ大の用は供ふる事必然の理ありんや則萬
 物の靈天地の密理を窮極し造化の秘機を發見す故に人
 をバ呼ぶる一箇の小天地をいふをり人物禽獸魚
 蟲及植物類を頭うつ唯一平は呼下を物とハいへど人身
 と禽獸類と其間隔つる事ハ何と唯百段千里のみあらん
 然らバ則萬物の靈能滋養し禽獸の類をバ供し資する事
 何を穢する理ありんや支那の書籍はる通り牛羊豕を

大牢と唱へて天地社稷をハ祭り或ハ人間の滋養ニ資
 る最上と致し了次ニ鶏豚や狗彘の類を常食と致し風
 俗其國の風ニ從ひ支那文字取り扱ふ人倫を正し三綱
 五常をバ立り其國聖經や賢傳の書ニ因るもの斯く支
 那國を慕ハる此皇國ハ生來肉食忌むハ愚の至り
 見むや皇國古代より神ニ獸類供ふ例神武權衡録にいふ
 牛肉鹿肉ハ上古の神々の食物なり如何ハ末世をバト
 る神何ぞ穢せし玉ふを食ふや能く其本を考ふる事
 多し云々又曰く牛を食ふは穢せし一年ハ半年ハ神
 へ参る事なりぬ極ら古の天子公卿牛を嘉肴とし
 食ハ玉ふを食ふや穢せし事明らぬ其外四足の類を

神ニ穢せし和州南都の春日大明神の祭禮霜月二十五
 日より二十七日に到る此祭ハ狐狸兔貉の類を村々の役
 當り之を殺し其數を定め神ニ獻む信州諏訪大明神
 此祭ハ鹿の血首七十餘數揃へし神前ニ供ふ是れ四足
 小穢せし物を何故神前ニ供ふを食ふ穢せし魚ナ
 事明白あり云々是れ其證あり且つ魚鳥を食ふ獸
 肉を食せぬ杯と云ふ事ハ道理聞えぬ事なり獸肉ハ何
 故穢せ魚鳥肉何穢がせぬと詮議せし唯固く執る狹隘の
 井蛙の見よ出るのみ能く觀ト玉ふを食ふ此世の用を為
 事ハ禽獸隔てるの穢し緒尾ヲ行きて羽翼ハ翔翔
 としと四足より走らば相違のみより知カハ別ニ變り

唯牛馬ハ重きをハ負ふ了遠きも致し多り或ハ田を
 ハ鋤くやうの實地の用を致せざるも夫れを牛を滋養物
 第一とす用ふ多り況や熊や狐狸猿猪鹿の類ハ世の
 中の贅物多しハ討取て世用と供し滋養もも資るハ至極
 の道理なり何と汚穢の理ありんや知カハなく禽鳥の
 其用を多し一例ハ鷹の鳥取り鶏の時を告ぐり鵜の魚を
 取るち獸は増り多し然らば體の小さいが鳥肉喰らむ獸
 類ハ大なる故は喰らぬ者多し鯨魚ハ喰らぬ者多し
 の好悪もいふつ餘一況や清く清く清くぬ上り論せむ植物
 野菜の類ハ人糞を吸収し汚穢物獸より喰らむ不
 浄ある者多しべき舌鼓打り味も野菜根音ト甘ト喜

ぶハ亦不都合といひつ餘一夫も全獸の清浄と人糞喰らむ
 犬もつ其他の木の實草五穀生活の肉清浄と夫も人糞
 吸収し肥大よ多し物以て神もも供へ身も食し潔白な
 ると思へも前後不首尾と申を餘し僕り愚按て断じん
 野菜根より獸肉ハ反り清浄皎潔と神も獸肉供ふも穢
 らし忌まむ人糞を頭あぬせよ致しん其吸収の染込
 ら成長したる野菜根反り不浄あるを乎神ハ非禮を受
 めらる心の上了申多し獸肉喰らふ參詣を忌まば糞汁肥
 大も野菜の類も忌ましん抑社參る趣意ハ神に向ふ
 了福德を求るやうの事多し一心不乱正直の道直事
 夫の如く私欲邪念を断ち拂ひ純一無雜一筋の心を以て

曇りなき神の鏡に照覽し預る為に參詣をまじり氣をならし
 獸肉を日々月々食まるとも何の穢れも何れも恐む萬一
 一つも有るや假令美服も素食も參詣を共種々無
 量心も邪念強欲の有る非道の願せを身體汚穢充滿し神
 納受の有るや因る汚穢の有るなりハ獸肉食は非
 ぞ私欲邪念の歸るのみ唯須く他を求るを待たざ
 人々固有天性の純良心よ立復り切磋琢磨の功を積み誠
 意正心修身し文明開化の恩徳を報ひん事を乞ふと云
 結疑

當時文明開化の世虚假を廢し實地を擧げ天下の人を
 各其天性に歸せしめ玉ふ眞は欽仰すべき事ありを

欽仰維新王
 政天
 文明如日國
 光鮮
 因循姑息翻
 然去
 斬疑當統開
 化先



抑天の毛髮を生む事ハ偶然の浮塵なる事ヲ更ニ去ク
 身體貴要の部分をバ保護セシむる為ニ頭鬚の腦府
 於る眉睫の眼界ニ於る鬚鬚の口門ニ於る陰毛此陰具
 於る如きは是等中ニ就テ頭腦ハ則精神の府一身萬機
 を統裁し思慮才覺の起る所其他痛痒寒熱寤寐動靜五氣
 の感觸七情の發見悉く腦府ニ統理せざるニ故ニ天
 星殊ニ多く毛髮を生トク寒氣を防キ毀傷を護リ人々を
 其精神を養ヒ其思慮を安ゼシム然ラハ則此毛髮
 剃リ落者ハ天意ニ背クト以テ佛門の徒悉く髮を
 剃リ如きは固ク人倫を絶フ宗旨論むるニ足らざる皇國
 上古ハ剃刀を用る事ナシト聞ク是モ天理自然の

淳風といふ處ニ中世ニ到リ半髮の俗トある者ハ傳ヘ聞
 く去リ一將を失其名反を謀リ戦争の時敵味方互ニ相紛亂
 了以テ同士討せん事を慮リ前面半髮を剃リ落了記
 認セシム因テ此頭を朝敵頭ト唱フト聞ク何モ致セ此
 半髮を剃リ落さる亦天意ニ戻ると以テ當時文明の
 道盛ニ行かれ都下ニ斬髮燦然トシ不開化の者ナシト
 いへ共政府漸ク遠ク鄙野僻郷俗ニ所謂野の末山の奥
 津々浦々ニ至リハ未ダ天の生理ニ貫徹セズ半髮結髮の
 者頗る多シ然リト以テ共文明遍ク全國ニ及ビ遂ニ開化
 致さる確乎相違ハ無キ共項日髮を惜みテ切リ兼
 姑息人僕ニ結髮斬髮の得失尋ぬ人あるニ因テ聊

贅言を吐き情實述る能く嗚呼普天下ハ廣大ノ人情亦
異ふ生ハ僻地頑村此人の如き姑息の多しん僕ウ贅言
萬一も取る處き何らバ幸甚ト愚説を吐露を所以あり

附

勸學以呂波歌

勇め唯類ハ稀なる大君の殊ニ新々御代の學びよ
論語よみ論語知らざる成らぬやう文よ心を深く留めよ
始め終りハ稀なる唯ひとまらぬ物學ひせよ
俄よるなる學びの進み口休まぬやう勤め勵めよ
譽らせし名をハ雲井ノ揚より親の御名まき四方ハ高く
經巡りて善き師善き友求むる水の器ハ副つたぬいど

虎と見え石は立つ矢のなめしつる念ふ心の透らさぬめ
知慧開く明らけき世は相老の松としくき根配りをせよ
理を窮め學の道ハ富む人ハ勤めよたゆみなき故とせ
脱きまらぬ舊き習ふ垢つき儘ふくのやぶせ衣
類同ハ善くぬ友を慎め朱ニ染せぬ身ハ赤くある
惜めまらぬ過る月日を矢の如く之をくむ學べ人
忘せまらぬ思ひ出さざる譬何を寢るも起るも學へ
神國の猶ハ尊く明らけき文の學ひよ進めをさる子
善ハ惡ハ皆身よ何れも我と己が心を照せ道をのびよ
寶と光るあけの鏡あまらぬやう研ぎ入る
禮を知り義を立る能く人として上を敬ふ道よあり

染み易く移りやまをば人あはれ己も克く禮も復せよ
月と日を學ぶの道の的とせば天下も智慧ハ照り
寝る思ひ起る誠は學ぶ事何劣るをいひへの人
何事も學の道多敷はる人の一と度我を千度せよ
埒明ぬ人と呼ぶ口惜き耻る勤め問ひ學ぶ道
むつくりと玉のやうなる心も筋目の通る光ある
埋む木よあまも愚はる故ぞ空もハ清き有明の月
井の中蛙と人よ呼ぶハ學の道のよき故あり
飲み食の奢りハ徒に眼の前を善き名を流す問ひ
大君の深き恵みの海の恩も滴も報ひく人
苦しめを苦しむ程は天地の恵も更ら明らけき
あ

矢は如く直き誠の心と筋は學ぶあま透らさるべき
丈夫と人よ呼ぶ代りハ何たゆむ履き物學ぶ道
閑し知ま支那と大和の今昔文よむ人の高き功績を
文しけ道明らけき君り代は懐手し如何くらさん
心うら身の賤しきを耻しつゝ學ぶ如何下置
選るも友ハ善きは限るあり麻の中なる蓬見し知せ
手舞ひ足踏も覺えぬ明らけき文は學ぶの深き恵
明らけき御代を戴く身うらせハ學ぶの道を勤めさめ
櫻見よ咲けハ波りと人の寄る薫りようれ道
君り代の光り届らぬ隈もあ津と浦も榮ゆ學ぶ場
許さる心の駒の繫き所唯ららむの手綱つらめ

惠まらるゝ文明らけき御代の恩人の人たる道のありんを
研きまらば研き一程の光りある學の道も玉は工する
知らぬ事知らぬといふ知せるなり如何にと問ひ學
繪の事ハ素きより皆后あせが唯誠をを真先よせよ
日は新く月よ盛りは物學む世よも尊きいづるあり
諸共よ問ひ學しよ研くを砥石の無くハ如何光らん
責もく師をばけり恨むも道傳ふ慈き慈き
進み行く我が日の本は文の道皆人毎よいづるあり

因循一掃 終

明治九年六月十六日出版願
明治十年二月出版發兌

著述者 增山守正

京都府士族

上京第卅一區上大坂町北三番路次止宿

京都府下平民

福井源次郎

下京第六區三條通寺町東江入貳拾番地

京都府下平民

福井孝太郎

上京第三十區寺町通三條上六百八拾四番地

京都 出版人
開版
書屋 出版人

